バティックに秘められた魅力

・　渡航国：インドネシア
・　渡航日：2013年９月１日～２１日
・　渡航メンバー

現代システム科学域	２回生	廣瀬　成美（ゼミ責任者）
生命環境学部	３回生	野田　健太
工学域	２回生	小酒　信昭
生命環境科学域	２回生	堀部　優太

目次

1. はじめに
2. バティックとは
　2-1.成り立ち
　　コラム１：インドネシアのもう一つの民族衣装
　2-2.作り方
　　コラム２：使い方と特別な意味
3. バティックの美しさ
　3-1.その魅力とは？
　3-2.魅力に秘められた背景
　　コラム３：バティックを着る日
4. バティックの今とこれから
5. おわりに
6. 謝辞
7. 参考文献・HP

1. はじめに

2012 年の夏、カンボジア・ベトナムへ旅行した際にわたしが一番心惹かれたものは、土産物店の軒先にたくさんかけられていた鮮やかな布たちでした。その美しい柄に惹かれ、アジア地域の民族衣装を調べてみたい、と思うようになりました。

そして様々な国の民族衣装を調べているとき、ある 1 つの民族衣装で着られている布がわたしの心をつかみました。それがインドネシア伝統のバティックというものです。“ろうけつ染め”という特別な方法で染められた布を総称してバティックと呼びます。

インドネシアは東南アジアの海に浮かぶおよそ 2 万弱ほどの島から成り立つ国で、古くから様々な国の貿易の中継地点とされていました。それゆえ多くの人、物、文化、宗教などがこの国を行き交い、インドネシア・ジャワ島の特産品であるバティックもその影響を受けました。中国古来の柄やヨーロッパ風の華やかな雰囲気、イスラム教独自の文様などが足されバティックは多国籍なものになりました。

1 枚の布に何百年もの歴史が詰まっていて、さらに地域ごとにも差があるという種類の多さに、わたしは驚きを隠せませんでした。それと同時に、だからこそ人の心をつかむ魅力があるのだ、と思いました。

またこの魅力を探りつつ、私が実際に見て思ったインドネシアにおけるバティックの存在を少しでも伝えたいと思い、このゼミを書きました。読み終わった後、少しでも多くの方にバティックの魅力について知っていただければ幸いです。

2. バティックとは

まずは、バティックの魅力を伝える前に、バティックそのものについて説明します。

「バティック」とはインドネシアのろうけつ染め布地の特産品のことです。インドネシアでは特にジャワ島のものが有名なため、日本では「ジャワ更紗（さらさ）」と呼ばれることが多いです。「バティック」という名前はインドネシア語で“たくさん”を表す“banyak”と、“点”を表す“tik”が合体した造語です。

更紗とは、布に文様を染め抜いたものを指す染織の言葉です。ジャワ更紗のほかにも、インド更紗やペルシャ更紗などがあります。

ろうけつ染とは？
蝋を塗る→染色する→蝋を削り落とす
以上の繰り返しで完成する染色方法です。
日本では京都の京友禅の蝋纈（ろうけつ）友禅もこれに該当します。

図１　バティックの布

2-1.　成り立ち

バティックがいつどこで始まったのかは明確にはわかっておらず、おそらく８世紀頃にインドからインド更紗が入ってきたことが起源だと言われています。16 世紀になるまでは土着の自然や特別な意味を持つ文様が主に布に描かれていました。

16 世紀ごろより海上貿易が発達し交易中継地点となったジャワに布と蝋が多く輸入され、同時にバティック作りも発達しました。中国・インド・中東やヨーロッパなどと貿易を通して交流を交わしていく中で、その国由来の柄や色使いが伝わりバティックの色柄はより多様になりました。

図２
スカルノ初代大統領

19 世紀半ばごろの第二次世界大戦後には原料が不足し、一旦生産が止まりました。しかし 1901 年に始まったスカルノ（図 2）政権はバティックを保護し、バティックを公務員や学生の制服として着用するよう推奨しました。このことがあって今まで単なる染布であったバティックはインドネシアの民族服として成り立つようになりました。また市民に親しまれるように原材料の輸入規制の緩和などが政策で行われ、バティックは大量生産されるようになりました。

近年はバティック職人の減少により、すべて手描きで行うバティックは減少しつつあります。2009 年 10 月 2 日にはバティックが持つ文化性ゆえに、バティックを保護するためにもユネスコの世界無形文化遺産に認定されました。

コラム１：インドネシアのもう一つの民族衣装

インドネシアにはバティックのほかにもう一つの布の製法があります。それは「イカット」と呼ばれ、染めた糸を使用して織られた布です。主にバリ島の東に位置する島々で作られています。

生地自体はバティックよりも分厚くできているので、バッグなどに向いている素材です。柄もバティックのように豊富で、また地域ごとに特色が出るのも同じなようです。

インドネシアは数千の島々によって成り立ち、地域も細かく別れているので、こういった違いがでやすいようです。

個人的な意見ですが、イカットの方が民族的な雰囲気が出ていて着るタイミングがわからないかもしれないです。難しいですね。あと、島国のインドネシアにしては山岳的な色合いだな、と思いました。

図３　イカット

図４
イカットを使用した鞄

2-2.　作り方

バティックは様々な文様がありますが、ほとんどすべて作り方は同じです。ここでは簡単に作り方を説明します。

① 布に下絵を鉛筆で描きます。布の下にトレーシングペーパーに移したデザイン画を置き、下から光を当てて鉛筆でなぞることが多いようです。ここでデザインをされる人から作業を職人に任せるそうです（図５）。

図５　下書き

② 下絵にしたがって、布に色を付けたくないところにロウを置きます。ロウは熱で溶かしたものを、チャンティン（図 6）という道具を使って置いていきます。チャンティンの先に付いている細い木を伝ってロウを流します。

図６　チャンティン

図７の写真は大勢で輪になって布にロウを引いています。

図７
ロウ付けの様子

③　ロウを置いた布を染料につけます。このときにロウを置いていない部分が染料の色に染まります。この作業は力がいるのでたいていは男性の仕事になるそうです。
実際に行った時も男性がされていました。

図８
染色した布を乾燥させる

④　お湯につけてロウを落とします。

⑤　①から④までを何度か繰り返し、1 枚の布の着色が完了します。

図９
染料に漬ける

⑥　ロウを落とした布は天日干しにされます。バティックの町・トゥルスミではこういった様子が工房ごとに見られました。染めたてなので発色が良く、同じ色のバティックが大量に干されていました。

図 10
天日干し

20 世紀頃まで、インドネシアの女性は 6 歳頃にこの技巧を学び、生涯を通してバティックを作り続けるとされていました。現在でもその伝統は存在するそうです。しかし、教育が充実するにつれ高校に行くことのできる子供が増加ました。インドネシアの子供は一般的に高校を出るとバティック職人以外で企業に就職したり、またアルバイトしたりという道を選択するとされています。インドネシアの高校においてバティック制作というのは文化体験の 1 つとされています。

現在、バティックの染め方には代表的なものが 3 つほどあります。以下の表に簡単にまとめてみました。

表 1　バティックの染め方

名称	概要	値段	難易度
トゥリス（Tulis）～手描き～	布の模様全てを手書きで仕上げており、裏表がわからないほど色が鮮明で美しいものです。制作には何か月もかかることがあります。	約 1 万～2000 万	高
コンビナシー（Kombinasi）～手描き＆型押し～	チャップに使われる型押しに手描きの要素を追加したものです。型押しを押した模様の一部に手描きで線や点を加えます。	500 円～1 万円	↓
チャップ（Cap）～型押し～	銅もしくは真鍮で作られた型押しに蝋を均等に付けて模様を量産する技法です。連続する模様に使われることが多いです。	300 円～1000 円	低

また表にあるバティックとは異なり、ただ染料を布にのせただけのバティックの柄を使用した布も存在します。それはロウを使用していないのでバティックとは呼べませんが、同じ市場に出回っているそうです。

コンビナシーは型押し（図 11）の隙間を手描きで埋めていくため、職人の方でも全て手描きのトゥリスと見分けが付かないことがよくあります。見分け方としては裏表に染色されているかどうか、蝋のけずれやかすり具合が独特であるか、また線の明瞭度によるそうです。こういった条件を満たしていればほぼトゥリスであるといえます。

図 11
型押し

このゼミでは主にトゥリス、コンビナシー、チャップなどの蝋を使用したバティックについて紹介します。

コラム２：使い方と特別な意味

バティックは主にサロン（図 12）と呼ばれる巻きスカートに使われています。が、他にもさまざまな方法で使われています。

インドネシアにおける結婚にはプロポーズから結婚式に至るまでそれぞれの場面で多くのバティックが使用されています。例えば、プロポーズをする際に贈られるバティックの文様も決まっているとのことです。また結婚式で使用されるバティックは「ワユ・テュムルン」（図 13）という特別な文様があしらわれており、「良いことが起きる」という意味が込められています。この柄はつる類の植物や花などがモチーフになっています。

また他にも「カパル・カンダス」（図 14）は船をモチーフにしており、「すべてがうまくいくように」との願いが込められています。

１つ１つの文様に意味や願いを込められたバティックは単に儀礼的なものだけではなく、人と人を結ぶ美しい媒体なのではないか、と思いました。

図 12
サロンとして使用するバティック

図 13
ワユ・テュムルン

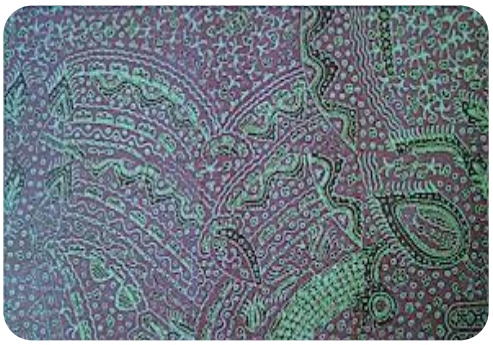

図 14
カパル・カンダス

3. バティックの美しさ

私がバティックをはじめて見たとき、とても単純に心の底から綺麗だなあ、と思いました。そして調べていくうちに、その色の鮮やかさと柄の豊富さに感動しました。この章ではバティックが持つ美しさ、そのなかでも私が心奪われたバティックの多様な柄とその背景にあるものについて触れていきます。

3-1. その魅力とは？

上記でも述べたようにバティックは美しく歴史が長いものです。この節ではその美しさを具体的に伝えられたらと思います。

✧ 色

バティックの色は重ねていくことで発色が決まるので、色使いはあまり自由ではありません。しかしそういった制約の中、職人は自由に柄に合った色を選び、私たちの心を惹きつけます。

はじめてお店でバティックを見たとき、棚に置かれている布がバティックであることを忘れて、ただ美しさに目を奪われました。夢中になって布を手に取って広げて、ということを繰り返しているうちに、色使いを見るようになりました。

色が変わると印象は大幅に変わります。同じ雲の柄でも赤色にすれば夕日、青色にすれば晴天、と変わります。染めるときの職人の方の気分次第と言ってしまえばそれまでなのですが、そういった志向の個人差も楽しむことができます。

✧ 柄

バティックの柄は様々な文様の組み合わせで構成されています。ひとつひとつの文様に対し意味を込め、ひとつのバティックが完成します。柄の種類は何千万とあり、正確な数はわかりません。

王宮が存在していた以前では着用する人によって使う柄が限られていましたが、最近ではそういった制限も無く好きな柄を着用することができます。

また柄を作るというのは工房の職人の方々の間で自由になされているそうです。下描きに描いていないけれど、職人の方の手によって改良が重ねられ模様が付け足されることもあるそうです。

作る人の感性が顕著に表れ、新たな柄をつくり続けることができるというのが、バティックの大きな魅力の一つであると思います。

3-2. 魅力に秘められた背景

バティックは表面上の色や柄のみが魅力を構成しているわけではありません。バティックには深い歴史が潜んでいます。またその歴史は１つだけではなく、ジャワ島の地域によって違いが多数存在しています。この節ではジャワ島を2つの地域（図14）に分けて解説します。

図 15　地域の分け方

ジャワ島は貿易が盛んであった北岸地方と王宮文化が栄えていた中部地方に別れています。

✧　北岸地方

インドネシアでは16世紀後半より海上貿易が大幅に発達しました。主にヨーロッパ・中東（イスラム教）・インド・中国・日本などの国とやり取りをし、これらの国から文化・宗教だけでなく商業がインドネシアへ流入し、バティックもそれの影響を受けました。地域によって大きく違いが出るところもありますが、バティック制作の適応力が高いという性質上、柄や色彩の浸透率は高く、どの地域から他国の柄が発展したのか、ということは追求しにくくなっています。

✧　中部地方

古い伝統が息づくジョグジャカルタとソロの宮廷で発達した伝統色彩と模様構成を継承し、ヒンドゥ教の霊鳥であるガルーダや宮廷のみが使用を認められた禁制文様などが存在していましが、今はその制限も無いようです。色合いは主に天然の着色料を使っていたため、大まかではありますが控えめな茶褐色系統と赤色系統が特徴的です。

下図の①②が北岸地方、③が例外的な地域、④⑤が中部地方に当てはまります。それぞれの解説は次のページです。

図 16　伝播図

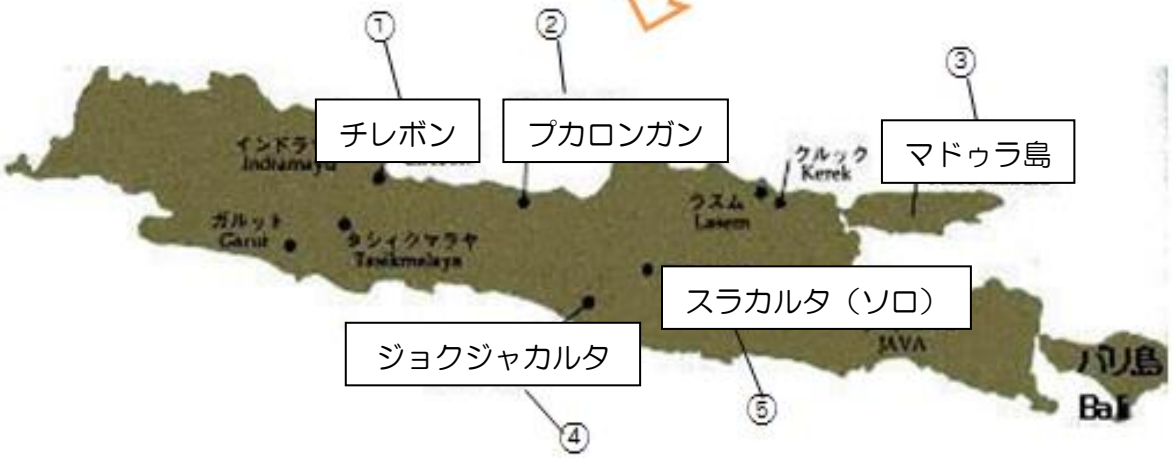

図 17　各地域

① チレボン

西部ジャワと中部ジャワの境に位置し、様々な国の貿易中継地点です。チレボンは主に中国とヨーロッパ・オランダの影響を受けました。

図 18
中国から伝わった柄

中国からの影響として１９世紀ごろ、中国からきた華人の増加とともに鳳凰や龍、獅子、雨雲などを描いた中国の吉祥文様の影響を受けたバティックが現れ始めました（図18）。色彩は茶、または紺の一色のグラデーションで染め上げられています。

大航海時代から始まったインドネシア植民地化にともない、１７世紀ごろからヨーロッパ文化の流入がはじまりました。インドネシアを植民地化していたのはオランダだったので、主に当時のオランダ植民地政府軍が持ち込んだ絵葉書や壁紙、陶器などの花柄がインドネシアに残りました（図19）。

図 19　花柄

実際にチレボンに行った際、中国から伝わった柄が今でもシンボルマークとして様々な場所に使われていました。タクシーの運転手の名刺や、ホテルのベッドカバー、テーブルクロス（図20）など細やかに使用されており、チレボンの人の愛着心を感じました。またトゥルスミというバティックの町ではたいてい店の裏に工房があり、何十枚ものバティックが一気に干されているのはとても美しかったです。また染め抜かれている途中の布もあり、見るだけでとても楽しむことができました。

図 20
テーブルクロス

② プカロンガン

ジャワ島では「バティックの町」と呼ばれるほどバティックの生産が盛んな街です。チレボンと同様に貿易の発展とおもに１９世紀ごろからインドやアラブ系の国々がバティック工房の経営に参加し、従来の伝統とは違うデザインが多く作られました。（図21）

図 21
黒と金で染められた
バティック

それまでバティックに製作者の名を残す、ということはしませんでしたが、新たな発想を持つ他国の人々（主に女性）によりバティックにサインする、という文化が出来上

がりました。この頃からバティックの世界にデザイナーと呼ばれる人が出てきたようです。また、人工染料の使用をいち早く手掛け、商業に生かせるようにバティックを変化させていきました。

③　マドゥラ島

　他国の影響はあまり受けず、船や魚など海に関係するものが多いです。また土着の自然など、目に映るもの、頭に浮かぶものを自由自在に描き出し、力強く明るい色彩が特徴的です。色彩も天然の茜染めが主で化学染料はあまり使われないそうです。マドゥラ独特の「グリ」と呼ばれる線描きが特徴的で、自然の風物を独創的に描いています（図22）。

図 22
「グリ」を使って描いた植物

④　ジョクジャカルタ

　古都としてジャワ文化の中心となった地です。王宮文化が栄えたため、禁制文が発達していたようです。（図23）文様の多くはイスラムの影響を大きく受けています。「ソガ」と呼ばれる染料の独特の茶褐色、紺、白、薄茶などの落ち着いた色彩が特徴です。

　ジョクジャカルタでは年配の男性がよくバティックを着ているのを見かけました。また遺跡などに行った際に観光客は簡単に貸し出されているバティックを腰に巻くこと（図24）が義務付けられていました。そういったところで文化をアピールすることができるのはとても面白いと感じました。

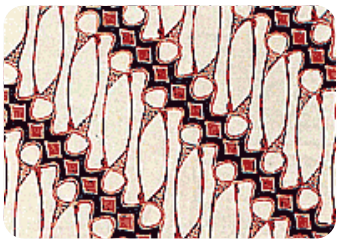

図 23
王族のみ使用を許された柄

図 24
遺跡内で身に着けるバティック

⑤　スラカルタ（ソロ）

　ジョクジャカルタと並ぶジャワ文化の中心地で、王宮文化の伝統が残っている都市です。従来の伝統柄に北岸地方の明るい色彩の要素を取り入れたため、柔らかい印象をもつ柄になっています。（図25）現代風の色や柄に対しても柔軟で、伝統にとらわれない形式を持っています。

図 25
ロイヤルブルーと金をあしらったバティック

バティックには地域性と深い歴史が存在します。これまで長く存在できたのはおそらくバティックがその美しさで人々を魅了してきたからでしょう。今では地域性などの特色も薄れてしまったのかもしれませんが、チレボンのようにシンボルマークとして扱われているところもあります。インドネシアの人々はこれからもバティックの美しさを守りつつ、作ることでも着用することでも発展させていくのだと思いました。

コラム3：バティックを着る日

インドネシアでは2009年にバティックがユネスコ無形文化遺産に登録されたことにより、バティックを着ることそのものを見直そうという姿勢の変化が見られるようになりました。そのため今では毎週金曜日を「バティックフライデー」として年齢を問わずバティックを着ることを奨励しています。

チレボンに行ったとき、実際に金曜日に町を歩きました。たまたま近くのモスクで礼拝があったため、正装している人が多かった日がありました。図26と図27の２つの写真はどちらもその日に撮影したものです。バティックをサロンと呼ばれるスカートに使用していたり、ストールとして使用していたり使い方は様々でした。女性よりも男性や子供たちの方が着用しているように思えました。女性はバティックをサロンとして着るよりも、動きやすさを重視した服装が多く見られました。対して男性はサロンを着用されている方が女性よりも多く、その色使いや柄も地域にとらわれることなく様々なものを着用していたように思えました。

皆それぞれ自分に似合った着方や色合いを選んでいて、おもしろかったです。

私も着ようと思って購入したのですが、機会が無く、買うだけで終わってしまいました…（図28）買うだけでも色々な布をみることができたのでとても楽しかったです。

図 26
ストールに使用する少年

図 27
男性のサロン

図 28
試着中

4. バティックの今とこれから

実際に訪れることができたのはチレボンとジョクジャカルタだけですが、それでもバティックを着られているインドネシアの人々が予想以上に見ることが多くて驚きました。今では地域ごとの違いが見られるのも少なくなり、着る人はあまり柄や色の意味を考えず、ただおしゃれをするという考えで着られることが多くなったのかもしれません。ですが私は現状を目の当たりにして、インドネシアの人々が現代の服装にバティックを取り入れていたことに感動しました。今の着用方法は昔とは違うものなのかもしれません。しかし、チレボンのように昔から伝わってきた柄を今も町のシンボルマークとして使うところもあるように、今と昔が織り交ざった形と、多様な文化がインドネシアそのものの形を投影しているのではないか、と思いました。

図29
王宮の係員の方

現在のインドネシアにおいて、生活が発達するにつれ子供たちの教育が充実し、職人になる道を考えないことも増えています。それに伴い全て手描きでなされるバティックも減少しつつあります。

しかし先述したとおり2009年にユネスコの世界無形文化遺産に登録されてから、インドネシアの人々のバティックを見る目は変化しました。今まで当たり前だと思っていた文化を改めて見つめ直し、それを自らのシンボルであると衣服に取り入れることが以前よりも多くなりました。

図 30
バティックの町
トゥルスミ

それ故、今では「バティック」と安価な「バティックに使われている柄のプリント」の混同がますますひどくなっています。バティックとは手作りの「ろうけつ染め」、プリントは機械で作られる工業製品です。プリントの中では蝋の割れ方まで再現した精巧なコピーまであります。安さゆえに量産品ばかりが売られ、またその量産品をバティックであると思われていることが多く発生するようになりました。

バティックを着ること自体は多く見かけるようになりましたが、そのバティックが手描きなのか、プリントなのか見分けることは職人の方でも難しいそうです。技術の発展と文化

の保護の両立はやはり困難があるようです。

- バティックにしかないもの

　わたしはインドネシアに行き、インドネシアに住む日本人でバティックのデザインをされている賀集由美子（かしゅう　ゆみこ）さんにお話を伺うことができました。賀集さんは1999年からインドネシアに住み始め、染織の勉強を経てバティックのデザインをされるようになったそうです。バティックを知り、そのデザイン性の高さと自由さに魅了されデザインの制作を始めたそうです。賀集さんは実際にはデザインのみを手掛け、下描きや染織などは工房にいる職人さんに任せているそうです。

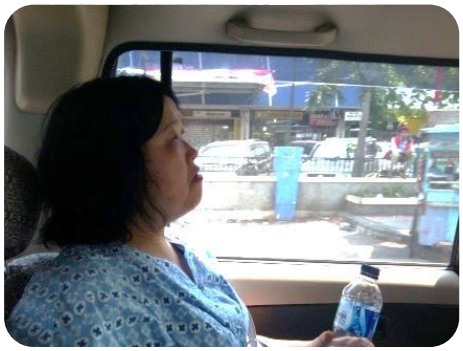

図 31　賀集由美子さん

　今、賀集さんにとってバティックとは、と尋ねたところ、少し考えながらもこう答えていただきました。

「布のデザインとは１つのメディアであり表現技法だと思っています。その中でもバティックは単純に色々できておもしろい。文化遺産でありながら色々できるっていう自由さは貴重だと思います。バティックとは、今できることを最大限できるものだと思っています。」

図 32
賀集さんのお店

　わたしはこの返答にとても感銘を受けました。今までバティックを調べているうえで、私は見た目の美しさや歴史の深さ、そして保護されるべきであるという考えをもとにしてバティックのことを見ていました。ですがこういった製作サイドの楽しみや喜び、また自由に描くことができるというバティックの幅の広さに感動しました。作る側のやりがい、着る側の楽しみ、この2つが両立していることはバティックの最大の魅力ではないかと思いました。

➢ インドネシアの人々の意識

上記でも述べたように、実際に2009年のユネスコ無形文化遺産に登録されるまで、インドネシアの人々のバティックへの関心は薄いものでした。当初はインドネシアの人より観光客が民族衣装として希少価値を置き、ほぼお土産用として扱われていました。しかし登録されてからは意識が変わりバティックを自らの文化としてとらえるようになりました。

図33
バティックのストール

わたしはそういった意識とは、今まで続いていた伝統を保護するという姿勢であると思い込んでいました。ですが、実際にインドネシアの都市を歩いていると柄の意味に捕らわれることも無く、単純に模様として自由にバティック（もしくはバティック柄）の服を着用していることが多かったです。例えば昔では王族しか使うことのできなかった柄を一般の男性が着用していました。しかも着用しているのは女性が多いのかと思っていたら、男性のほうがシャツとして着用することが多く、推測していたこととは大いに違っていました。

図34
バティックで作られた小物

自身の固定観念と地元の人々の意識には大きな差があり、驚きが大きかったです。彼らはあまり伝統に重きを置かず、自らのやりたいように着たいようにバティックを受け入れているようでした。

そういった点で賀集さんとインドネシアの人々の考えは似ている、と思いました。賀集さんが作られているバティックは伝統的なものとは違っていて、新しい柄や色合いをひたすら自分の思うままに描いているようでした。

➢　バティックの問題

　バティックは、未だ進化し続ける文化なのだと実際にインドネシアに行って、自分の目で見て感じました。昔からの伝統の柄や色を守るだけでなく、新たなものを取り込んでいく姿勢に驚き、うれしく思うことが多かったです。

　それでも、バティックには問題があります。４章の最初でも述べたように「手描き」と「プリント」が混在することです。これらの混在は伝統的な手描きのバティックを減少させてしまうことに繋がります。このふたつの間には同じ柄であってもロウのけずれかたやかすり具合、線の明瞭さ、裏表の染色など、わかりにくいですが違いが存在します。プリントは工場で大量生産されるので価格も安いのですがロウを使っていないのでバティックとは呼べません。ですが市場ではこれらが全て混在し、流通しています。手描きのバティックとプリント製のバティックが混在することが現在では問題になっています。

　プリントで作られるバティックには利点ももちろんあります。日常使いするバティックは消耗品となってしまうので、それを安いもので済ますというのは至って自然な考え方だと思います。だからといって伝統的で細やかな柄をあしらうことのできる手描きのバティックを無くしてしまうのはとてももったいないことだと感じます。普段は安価なプリントのものを使い、行事など大切なときにはろうけつ染めのものを使うという使い分けがあってもいいのではないか、と思いました。

　手描きのろうけつ染めは、１から新しい柄を描くことができます。世界に１枚しか存在しないものであると考えれば、自然とその価値は見出されるはずです。手描きもプリントもそれぞれに良さがあります。どちらかを淘汰する必要は無く、大事なことは、いつまでもバティックという文化を守り、また進化させていく姿勢ではないのでしょうか。

5. おわりに

図35
バティック店を経営する
ブティさん親子と

まず私はバティックの色や柄が好きです。濃い青色と金色を合わせた王族らしい豪華な色使いや、自然の海を表したような力強い単色で染められたものは私の好奇心を刺激しました。多様な色の組み合わせがあること、それに加えて柄も多くあること、それら全てが私の目には美しく映えました。また調べていくうちに深い歴史や現状、問題などがあることを知り、実際に行って見てみるとバティックを着ることがインドネシアらしい、自由気ままなものであることも知ることができました。バティックには表面上を調べただけではわからない魅力が秘められていました。バティックが変わりゆくその背景には、インドネシアに住む人々がいつもいるような気がしました。彼らの人柄に触れたからこそ、バティックも身近に感じられたように思えます。

バティックの魅力とはなにか？と聞かれると、以前であれば見た目の美しさ、と答えましたが、今聞かれると私はおそらくすぐには答えることができないと思います。バティックは美しい布であり、インドネシアの文化を代表するものであり、新しい道を開拓する染色方法であり、きっと他にもさまざまな魅力があるのでしょう。私が感じたほんの一部分のこれらの魅力ですらも私にとっては全てが新鮮で、驚きの連続でした。様々な魅力の傍らでバティックには様々な問題が存在しています。ですが、私はこの文化ができるだけ美しく、そして長く続き、多くの人々に愛されることを願っています。

6. 謝辞

最後になりましたが、このゼミを制作するにあたってお世話になった多くの方々に心から感謝いたします。
今回調査する際、質問に答えてくださいました日本ーインドネシア服飾文化協会　会長の戸津様。理事長の渡辺様。インタビューに快く応じていただいた賀集様。その他にもこのゼミを作成するうえで協力していただいたすべての方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

7. 参考文献・HP

・　「インドネシア：島々に織りこまれた歴史と文化」小池誠著
・　「BATIKーバティック」富田博司著
・　「ジャワ更紗文様図鑑」吉岡幸雄著

・　日本ーインドネシア服飾文化協会
http://jicca-kansai.cocolog-nifty.com/blog/

・　Studio Pace
http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Momiji/8181/